

原 著

開心術後における疼痛コントロール ～経静脈的自己調節鎮痛法は早期離床に有効である～

大工廻賢太郎¹⁾ 原田真二¹⁾ 平安名常宏¹⁾ 田畑耀¹⁾ 山里まゆみ¹⁾ 寶泉春夫²⁾ 米谷聡²⁾¹⁾医療法人社団 公仁会 大和成和病院 リハビリテーション科 ²⁾医療法人社団 公仁会 大和成和病院 麻酔科

要旨 ～ Summary ～

【目的】

心大血管手術における胸骨正中切開後の鎮痛として、経静脈的自己調節鎮痛法 (Intravenous-Patient-Controlled-Analgesia 以下: IV-PCA) を使用し、疼痛コントロールすることで術後のリハビリテーション (以下リハビリ) の進行に影響をもたらすか否かを検証することとした。

【対象と方法】

2017年7月1日～10月31日の間に当院で胸骨正中切開による心大血管手術を受けた57症例中、除外対象者を除いた31症例を本研究の対象とした。IV-PCA使用群16症例とコントロール群15症例をランダムに振り分け、① Numeric Rating Scale (以下:NRS)、②リハビリ開始日、③ICU滞在日数、④無気肺スコア、⑤悪心・嘔吐 (post operative nausea and vomiting 以下: PONV) の有無、⑥患者満足度の6項目を比較・検討した。

【結果】

2群間にてPONVのみ有意差を認め、他比較項目においては有意差を認めなかった。

【結語】

今回、IV-PCAは開心術後における疼痛コントロールにおいて、各アウトカムについて従来の鎮痛法と同等の効果を示した。今後、患者のニーズや術式に合わせた鎮痛コントロールの一つとして有効となる可能性が示唆された。

【はじめに】

術後の離床において、疼痛コントロールは重要である。従来の鎮痛法では、内服薬、点滴などの非ステロイド抗炎症薬 (NSAIDs) やアセトアミノフェンによる疼痛コントロールを行ってきたが、鎮痛効果が穏やかで、効果発現までに時間を要しており、疼痛時におけるリハビリ進行に難渋した経験があった。

近年、簡易的システムによるIV-PCAは、患者自身が自分の判断で、鎮痛剤を投与して鎮痛を得る方法である。術後の鎮痛法として、IV-PCAは早期離床によい影響を及ぼす可能性があると考えられており、広く普及しているが、開心術後における使用に関しての大規模な比較検討を行った報告は少ない。そこで今回、心大血管手術における胸骨正中切開後のIV-PCA使用は早期離床に有効か比較検討を行うこととした。

【目的】

心大血管手術における胸骨正中切開後の鎮痛法としてIV-PCAを使用し、疼痛コントロール

における術後のリハビリテーション進行に影響をもたらすか否かを検証すること。

【対象】

2017年7月1日から10月31日の間に当院で胸骨正中切開による心大血管手術を受けた57症例中、透析患者や緊急症例、術後1日目にリハビリの介入が出来なかった症例、術前低ADL症例を除外した31症例を本研究の対象とした。除外理由は、当該患者はリハビリ介入が遅延することが予測され、経時的な自然緩解による鎮痛効果のバイアスを避けるためである。

【方法】

RCTによる前向き介入研究を行った。IV-PCA使用群 (以下:A群=IV-PCA+従来の鎮痛法)16症例とコントロール群 (以下:B群=従来の鎮痛法のみ)15症例にランダムに振り分けた。A群では術後よりIV-PCAを使用し、48時間持続投与した。IV-PCAの効果が不十分な場合は従来の鎮痛法を行った。従来の鎮痛法とは、WHO三段階除痛ラダー法による内服薬、点滴などの非

対 談

学術論文

調査・活動報告

世界の最先端を学ぼう

早期離床Q&A